
オモイカワラズ

新辺カコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オモイカワラズ

【Nコード】

N6381S

【作者名】

新辺力コ

【あらすじ】

風邪で寝ていた少女に、きつねの友だちができました…。

昔々のことでした。ある村に、ひとりの女の子がおりました。

女の子の名前は、お紺。優しいけれど、少し体の弱い女の子でした。

ある日のこと、ひと月前にひいた風邪が治らず、お紺は伏せっております。

立ち上がるとふらふらするし、咳がとまらないのです。

「コンコン…コン！…あーあ、はやくお外で遊びたいなあ…」

いい加減、寝ているのも退屈です。千代紙でも折ろうかと手を伸ばしたときでした。

「呼んだの、おまえか？」

と、声が聞こえたのです。

お紺はびっくりして振り向くと、そこにはひとりの女の子がいました。お紺とおなじくらいの年頃でしょうか。帯を胸高に締め、髪は稚児髷に結っています。

「おらのこと、呼んだらろ」

お紺はくびを振りしました。女の子はくびを傾げます。

「おつかしいなあ、だってさっき『コン、コン』って、おらの名前が聞こえただ」

お紺は可笑しくなつて笑いました。

「それは多分、さつきわたしが咳をしたんだわ。…ねえ、あなたも『こん』っていう名前なの？」

女の子は頷きます。

「『あなたも』ってことは、おまえも『コン』って名前か？」

「そうよ。色の名前の『お紺』」

「おらは、きつねの『おコン』だ。おなじ名前なのも何かの縁だから、おらたち、仲良しにならないか？」

お紺は喜びました。体が弱く、床に伏せていることが多いお紺には、あまり多くの友だちがいなかったからです。

「それじゃ、また来るからな」

「待つてゐるわ。また遊びに来てね」

その夜、お紺は千代紙で鶴を折りました。
たくさん、たくさん折りました。

（一番綺麗に折れたのは、おコンちゃんにあげよう）

そう、思いを込め、たくさん折りました。

次の日、いつ来てくれるかとソワソワしているお紺の耳に、

「お紺！」

と、声が聞こえました。

振り向くと、いつからいたのかおコンが座っています。

「ソワソワして、外ばっか見てたな」

「だって、楽しみだったんだもん。来てくれるの」

お紺は、にっと笑い、タベ折った鶴をおコンに手渡しました。

「これ、一番綺麗にできたの。おコンちゃんにあげる」

おコンは手渡された鶴をしげしげと眺めます。とっても嬉しそうに。

「綺麗なもんじゃなあ…。ありがとう。おらも、お紺にあげるもんがあるんじゃない」

おコンは薄紫色をしたちいさな花を渡しました。派手な花ではないけれど、可憐でかわいい花でした。

「『竜の髭』の花じゃ。珍しくもない野の花だけど、綺麗に咲いておったから」

「りゅうのひげ…。野の花なの？」

たんぽぽやれんげ草なら知ってるけれど…。

「綺麗…」

「草ばかり高く育つて、目立たん花だから。こつやつてこの花だけ見ると綺麗じゃろ？たくさん咲いとるところがあるから、そこから採ってきた」

「見てみたいな。この花がいっぱい咲いてるとこ」

お紺は目を輝かせて言いました。

「風邪がなおつたら、一緒に見に行こう。そう遠くない原っぱじゃ」

「わぁ、嬉しい。約束ね」

「うん、約束。げんまんじゃ」

ふたりは互いにゆびきりをします。

「ゆーびきりげんまん、死んだらゴメン！」

ゆびきりをした後、おコンが言いました。

「お紺、はやく治るように、おらがまじないをかけてやる。すごい効果のあるまじないじゃ」

おコンは先ほどもらった鶴を手に取り、ふうつと息を吹きかけました。

途端に、千代紙の鶴がまるで生きているもののように辺りを飛び回ります。

「お紺が一生懸命に思いを込めた鶴じゃ。流石に、元気に飛びよる」

お紺はただ呆氣にとられて、おコンと鶴とを交互に見比べました。
「本当は枯れ葉を使うんじゃ。相手のまわりを三回舞わせる。そうすれば、枯れ葉が病を吸い取ってくれる。…あまり人には術や、まじないをみせてはなんのじゃが…お紺はおらの友だちだから特別だ」

鶴はお紺を気遣うように周りをくるくるまわり、お紺の手のひらで羽を休めます。

血が通っているかのように、あたたかい鶴でした。

その数日後のこと。

お紺はすっかり元気になりました。

「おコンちゃんのまじないが効いたんだわ」

「よかったの。でも、無理はするな。今日は日差しが強いから」

二人は連れ立って、約束の原っぱに出かけました。

日は高く、きらきらと輝いています。

「ここに、『竜の髭』がたくさん咲いとるんじゃ」

そこは、お紺も何度か来たことがある場所でした。
春に、たんぽぽやれんげ草をつみに来たこともあります。

「ここに…。気づかなかったなあ」

「春に咲く花は目立つが、夏の野の花は余り目立たぬものが多いんじゃない。おまけに、これは草にかくれておるからの」

おコンはガサガサと草をかき分けます。

「ほら、これじゃ。秋になったら緑色の、つやつやした実が出来る」

真冬は、もっと綺麗なんじゃ…。と、おコンは花をなでました。

「真冬にも、花が咲くの？」

「いや、実のほうじゃ。真冬になったら緑色だった実が、青く熟すんじゃない。おまえの名前とおなじ、紺色に」

「珍しいね。赤じゃなくて、青く熟すなんて」

「とつても…綺麗なんじゃ…」

おコンはもう一度呟きました。その口調はどこか寂しげなものがありました。

お紺は心配げに声をかけます。

「おコンちゃん…？どうかしたの」

「いやいや、何でもない。…『竜の髭』は、咳止めの薬にもなるんじゃない。少し掘っていくか」

くるりと振り返ったおコンには、もう寂しげな感じはありませんでした。

「わぁ！…綺麗。本当に紺色だわ」

季節は、冬になっていました。

濃い青の、小さなトンボ玉のような実を見つけてお紺ははしゃぎます。

「知らなかったなあ…冬の草が、こんなに綺麗なんて。おコンちゃん、ありがとう」

おコンは、じっとうつむいています。

「おコンちゃん…どうしたの？」

「……お紺。…おら、もうおまえと遊べないだ」

おコンは肩を震わせていました。目に、涙がいっぱい溜まっています。

「おら、隣の山に…嫁コに行くことになっただ」

「お嫁に…？」

「仕方ねえだわ。きつねの娘は、冬になって『竜の髭』の実が熟するとき…嫁コにいくだ。…お紺。おまえは大きくなるのに、長い時がある。けど、きつねは冬がきたら、もう、おとなだ」

「おコンちゃん…もう、あえないの…？」

お紺はポロポロと涙を流し、おコンを見つめます。
ひゅうひゅうと冷たい風が、頬を叩きました。

「…オモイカワラス…」

不意に、おコンが言いました。

「思い、変わらず。『竜の髭』に込められた言葉じゃ。おまえを友だちとして、大事に思っとる。嫁コにいつても、その思いは変わらない」

「おコンちゃん…元気で、幸せに…しあわせになってね……」

「お紺も、達者で、しあわせに暮らせ。…約束じゃ」

おコンは、小指を出しました。
ゆびきりです。あるとき『竜の髭』の花を見にいくつ、と言いあったときのように。

「ゆびきり、げんまん…」

「死んだらゴメン…」

雲一つない青空に、雨が降ってきます。暖かな雨が、ぱらぱらと二人を濡らしました。

「狐の嫁入りだ」

その言葉を言ったのはどちらだったのか……。

あれから、長い時が過ぎました。お紺は大きくなり、隣村にお嫁にゆくことになりました。

支度が整い、家を出ようとした、そのときでした。

はらはら、はらはら……

薄紫色の、可憐な花吹雪が降り注ぎます。

あのとき、おコンがくれた花。友だちのしるしにくれた『竜の髭』の花が。

「…おコンちゃん……」

「こらこら、まだ婿殿の顔も見えないのに、泣く人がありますか」

お紺はポロポロ涙を流しました。暖かい涙を。

山のふもとに、少女がひとり立っています。

帯を胸高に締め、髪を稚児髷に結った少女が。

微笑みを浮かべ、肩に千代紙の鶴をちゃんと休ませて……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6381s/>

オモイカワラス

2011年10月8日19時52分発行